

『日本蔵 晩清中日朝筆談資料 大河内文書』の出版

島 善高（社会科学総合学術院教授）

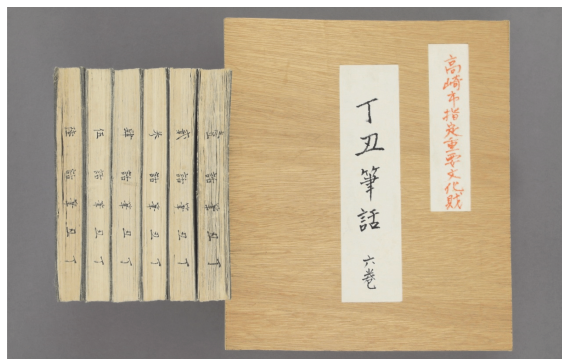
早稲田大学図書館の特別資料室には「大河内文書」が21点収蔵されている。そのうち、「大河内輝声宛書簡貼込帖」、「書簡詩文等貼込帖」、「李長栄ほか詩文貼込帖」、「桂林荘叢書」、「蜂窠日々録」以外の「羅源帖」「庚辰筆話」「茶園筆話」は、もともと大東文化大学や頼政神社（群馬県高崎市）に所蔵されている「大河内文書」と一体のものであって、高崎藩最後の藩主であった大河内輝声（1848～1882）が、



(図1) 早稲田大学図書館蔵『大河内文書』



(図2) 大東文化大学図書館蔵『大河内文書・戊寅筆話』



(図3) 頼政神社蔵『大河内文書・丁丑筆話』（高崎市指定重要文化財）

1875（明治8）年から1881（明治14）年にかけて、中国人や韓国人との間で交わした筆談の記録である（図1～3）。

今回出版された『日本蔵 晩清中日朝筆談資料 大河内文書』は、これら「大河内文書」の影印版である（図4～6）。

この「大河内文書」は、大河内氏の菩提寺である埼玉県野火止の平林寺に保管されており、当初100冊前後あった由であるが、本学の教授であった故実藤恵秀（1896～1985）が調査した1943（昭和18）年当時には71冊が現存し、しかも水損虫損で傷みの激しいものもたくさんあった。戦後、大河内輝声の子息輝耕の時代に大東文化大学と早稲田大学とに分けて寄贈されることになったが、実藤は、研究に資するため、1958年（昭和33年）11月、両大学のものを併せてマイクロフィルム化した。その時点で、「大河内文書」は66冊に減っていたという。

「大河内文書」が早稲田大学図書館に寄贈されるに至った経緯、「大河内文書」の内容などについては、実藤恵秀著『大河内文書：明治日中文化人の交流』（平凡社東洋文庫18、1964年）に詳しい。

今、この筆談記録の現存状況と所蔵先を記せば、以下の通りである（頼政神社は、大河内氏の遠祖源頼政を祀った神社。「実藤恵秀抄本」は早稲田大学図書館蔵）。

- 「羅源帖」2～18（1・15は原缺、早稲田大学図書館2・18、大東文化大学図書館3～14・16・17）（1875年9月3日～1876年8月22日）・・・筆談数76回。
- 「丁丑筆話」1～7（頼政神社1～6、大東文化大学図書館7）（1877年7月7日～12月31日）・・・筆談数90回。
- 「戊寅筆話」1～26（24は原缺、大東文化大学図書館1～5・7～14・16～23・25・26、実藤恵秀抄本6・15）（1878年1月2日～12月15日）・・・筆談数169回。
- 「己卯筆話」15、16（1～14は原缺、大東文化大学図書館15、実藤恵秀抄本16）（1879年12月12日～12月31日）・・・筆談数9回。
- 「庚辰筆話」1～9（早稲田大学図書館6・8・9、大東文化大学図書館2・3・5・7、実藤恵秀抄本1・4）（1880年1月1日～5月26日）・・・筆談数74回。

- 「茶園筆話」1～17（早稲田大学図書館2・7～9・11～17、大東文化大学図書館1・3～6・10）（1880年5月10日～1881年10月13日）・・・筆談数241回。
- 「韓人筆話」1（大東文化大学図書館）（1880年8月27日～9月6日）・・・筆談数8回。
- 「書画筆話」1（大東文化大学図書館）・・・主に大河内の詩文を王茶園が添削したもの。

この「大河内文書」には、日中韓の外交官・文化人合計132人（日本69、中国58、韓国5）が筆談者として登場し、筆談内容も非常に豊富であるため、これまで数多くの研究者によって注目されてきている。特に中国では筆談資料の研究に熱心であって、例えば南開大学の劉雨珍編『清代首屆中日公使館員筆談資料匯編』（上下2冊、天津人民出版社、2010年）には、「大河内文書」の約四分の一が収録されている。

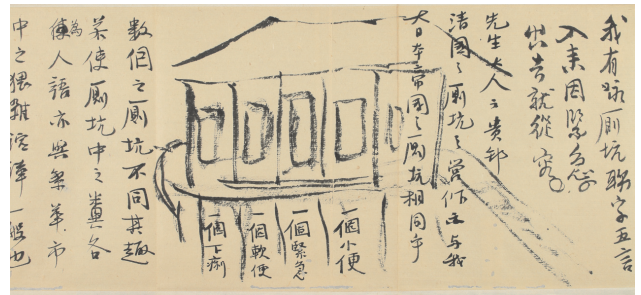
しかし、「大河内文書」全体を研究者に提示する研究はこれまでになく、また実藤恵秀が作成したマイクロフィルムにも一部欠落があった。そこでこのたび、浙江工商大学東方語言文化学院の王宝平教授は、大東文化大学、早稲田大学、頼政神社に所蔵される「大河内文書」全体を新たに撮影し直し、カラー印刷で出版された。それがここに紹介する王宝平主編『日本蔵晚清中日朝筆談資料:大河内文書』全8冊3785頁（浙江古籍出版社、2016年12月、4800元）である。



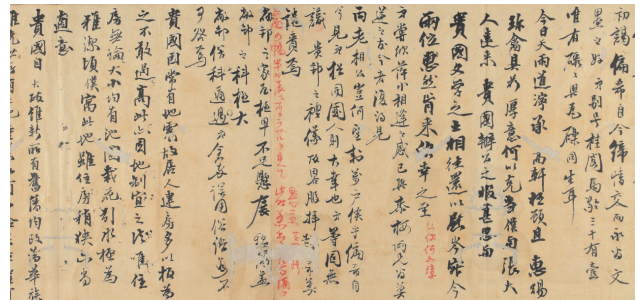
（図4）『日本蔵晚清中日朝筆談資料 大河内文書』全体写真

本書には、第1冊に王宝平「近代中日筆談文献之瑰宝一〈大河内文書〉前言」、羅源帖2～11、第2冊に羅源帖12～18、丁丑筆話1～4、第3冊に丁丑筆話5～7、戊寅筆話1～8、第4冊に戊寅筆話9～18、第5冊に戊寅筆話19～26、己卯筆話15、16、庚辰筆話1～3、第6冊に庚辰筆話4～9、茶園筆話1～4、第7冊に茶園筆話5～14、第8冊に茶園筆話15～17、韓人筆話、書画筆話、

附録一「《大河内文書》佚存一覧表」、附録二「《大河内文書》細目」、附録三「筆談者小伝并索引」が収録されている。



（図5）大河内輝声と羅雪谷のトイレをめぐる筆談（406頁）



（図6）大河内輝声が初代公使何如璋を初めて訪ねた際の筆談（1351頁）

王宝平教授の前言には「大河内文書」の内容と価値、あるいは研究状況などについて詳細に記述してあり、また巻末の「筆談者小伝并索引」はこの浩瀚な「大河内文書」を検索する上で非常に便利である。ただ惜しむらくは、この索引は筆談当事者の名前だけを対象とし、会合に出席してはいるが筆談を残していない人物、会合で話題に上った人物の名が取り上げられていないことである。

本書の出版が最後の追込みを迎えていた2016年4月、早稲田大学の特別研究期間制度を利用して浙江工商大学東方語言文化学院に滞在することとなった筆者は、「大河内文書」に登場する人名すべてを取り上げた索引があれば便利であると意見を述べたものの、編集作業の一端を垣間見て、索引作りが如何に大変な作業であるのかを知り、筆談者のみの索引も止む無し、否、その方が思わぬ発見もあり、かえって本書を利用する楽しみも増すであろうと思うに至った。

いづれにしる「大河内文書」の筆談記録は、当時の文化人たちが、実に多岐にわたる話題について、率直な感想を書き記したものであって、汲めども尽きない味わいがある。本書の出版によって、明治前期の日中韓文化交流の研究が一層進展することを期待して止まない。

【図版】

王宝平氏提供